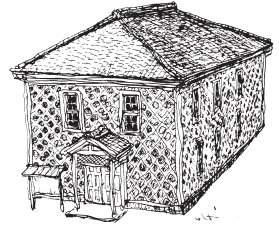


演説館



福澤先生とその門下生たちは、西洋のスピーチ、ディベートを研究し、わが国の「演説」を創始しました。三田演説館は、1875（明治8）年に開館した日本最初の演説会堂です。

●文学部長

倉らたけいこ
倉田敬子

新しい学びのスタイルの模索

4月、慶應義塾では対面授業が9割となり、キャンパスに学生があふれ、授業の教室ではおしゃべりがなかなかやみません。実に3年ぶりに見ることができた以前と同じ、人が集まるキャンパスの様子です。ただ、全く同じではありません。オンデマンド授業は学生に人気で、何百人、科目によっては千数百人の履修希望者が殺到し、抽選で履修者が選ばれました。対面授業のやり方も変わりました。私はコロナ前には、教室で紙のコピーを配布し、板書をするスタイルでした。現在はパワーポイントのスライドを作成し、事前にK-LMSというデジタル学習支援・管理システムからそのPDFファイルを提供しています。学生が対面授業に出席できない場合には、ZoomやWebexといったオンライン会議システムで授業を同時配信し、録画も行っていきます。授業中に行っていた小テストもK-LMSで出題し、採点結果も学生に提示しています。

コロナ前から学習支援システムはあり、部分的に利用もしていましたが、コロナによって突然全ての授業をオンデマンドで

実施することになったことで、大学における学習のあり方、スタイルの変化にあらためて向き合わざるをえなくなったのではないでしょうか。対面でのリアルな反応の重要性をあらためて認識できましたが、学生個々人が自分のペースで資料を学ぶことの柔軟さをどう組み入れていくかは今後の課題といえます。

大学の教育は、文字テキストを基盤としてきました。これまで「知」の伝達は印刷資料、特に本を中心に行われてきましたが、今では電子ジャーナルや電子書籍というデジタルで入手できるようになりました。本という紙のまとまりを触りながらじっくり読むことから、パソコンのスクリーンで読むことへの変化は、没頭する深い読みから注意散漫なザッピングな読みへの変化といわれています。私たちは集中した深い理解ができなくなるのか、それともデジタルにネットワーク化された情報を活かしたこれまでにない思考を獲得できるのか、新しいメディア環境における学習スタイルの模索は緒に就いたばかりです。